

# 心に添う

田中三保子

でもいい、がまんする

クラスにはさまざまの子がいる。わずかの間にお互いに分かりあえるようになる子もいれば、長い期間かかってやっとなじみあえるようになる子もいる。

一緒に生活した時間はたくさんであっても、私にはよく分からないものを内に抱えていると思われる子もいる。できればそれを理解し、気持ちに寄り添った保育をしたいと願う。

四歳の五月のことである。

私が子どもの要求に応じて携帯電話を作っていると、A子がすっと脇に寄ってきた。机の上の腕時計のひとつを手にとって、じっとながめている。そういえば、A子にも一番最後に頼まれて腕時計を作っ

たけれど、取りにこなかった。あの時は、ひとつ作ったら次々に頼まれた。忙しさにまぎれて名前を書かなかったので、どれが誰のものかわからないまま三つが残った。必要になったら取りに来るだろうと、三つともそのまま机の上に置いておいたものである。

あんまりしげしげとながめているので、何を言われるのだろうかとちょっと身構えていると、A子は「これ、A子のじゃない」と言った。また文句を言われるのだろうか、名前を書いておけばよかったと後悔していると、「A子のは、ここが白くないの」と文字盤を指さした。なるほど、ピンク色に塗られた文字盤の右はじがわずかに塗り残されている。A子のこういう指摘はたいがい当を得ている。きつと白い部分がないように丁寧に塗ったのである。それを誰かに間違えられてしまった、悔しいに違いない、でも今さら探すのも難しいし、困ったなあ、と

思いめぐらしていると、思わぬことばが返ってきた。「でもいい、がまんする」。私はほっと胸をなでおろした。「誰かが間違えちゃったのね。ごめんなさい。でも、よかった、そう言ってくれて」。塗りが残しがやはり気になっているようなので、「このところ、ちょっと塗ってみる」と言うと、「ふーん」という返事が返ってきた。そして、ピンクを塗り足してから腕時計を引き出しにしまったようであった。

A子は三歳の入園後しばらくすると、「いい子の衣を脱ぎ捨てたようにいろいろなことをした。周りの様子をとてもよく見ている、誰かが紙粘土のごちそうを金魚鉢に入れれば、にこっと笑って自分もやった。止められ



でも止められても何度でもする。あまりのことに止める手に思わず力がはいると、キッと私をにらみつける。

「何でせんせいはA子にはそうやるの」。他の子どもとの私の微妙な対応の違いを敏感に感じとり、私の心の中まで見透かしたような問いかけに、ことばに詰まることもたびたびであった。

四歳児になってからは、A子が以前より穏やかになってきたような気はしていた。私のことばがはねかえされないことも増えてきた。しかし、こんなにも素直にA子とやりとりができたのはおそらく初めてである。自分に添うことを要求し続けてきたA子が、ようやく他人に心を添わせられるようになったかと、この時、私はとても嬉しかった。

### 私のイヤリング、どうしたの

二週間ほど後のことである。

部屋の入り口に入ってくるなり「せんせい、私のイヤリングと腕輪、どうしたの」とA子はなじるように言った。

B子がセーラーマーズのイヤリングと腕輪を作ったのを見て、A子が「イヤリングと腕輪を作って」と言ってきたのは、一週間以上も前のことである。「丸いのがいい」と言うので、紙に丸を三つ書いて渡すと、色を塗って持ってきた。そして「せんせい、あとやっという」という様子で私に手渡したとき、今までずっと知らん顔だったのである。

私としては、A子の目の前で、A子と一緒に作りたい。子どもたちが帰った後、机の上に置かれたままの三つの丸をながめては、私は毎日思索していた。あの時あれだけ強い調子で要求してきたのに、一体これは何なの、と、ちょっとむっとした気持ちもあって、このままA子の引き出しにしまっておくかとも思った。もう一度A子にどうするかた

ずねてみるべきだろうか、それとも、A子の気持ちに添って作り上げておこうかと思ひ悩んだ。結局、私は、自分で作っておくことに決めた。それは、私が日頃、A子の中に大人への強い反発を感じていたからである。大人を信頼してもらうには、A子の場合には、何はともあれこちらがA子に添うことが必要なのかもしれない。腕輪はリボンの色がわからなくて作れなかったので、イヤリングだけを完成させ机の上に置いておいた。

「どうしたの」と問われた時、私は窓側の机でお面を描いていた。なじむようなもの言い、相変わらずねえ、と思わず苦笑すると同時に、やっぱり作っておいてよかったと思った。「そこにできているわよ」と答えると、A子は机の上を探して見つけたようであったが、今度は「腕輪はどうしたの」と責められた。「リボンの色がわからなかったからできなかったの。お面が終わったら作りましょう。少し

待ってて」と答え、様子を見てみると、A子はようやく穏やかな表情になり、私を待ってくれた。腕輪を作り、A子の腕につけると、A子はそれをすぐにはずし、イヤリングとともに引き出しにしまった。私はA子が使いたいからせっついてきたと思い、急いで作ったのに、はぐらかされたような気持ちになって、いつまでも釈然としなかった。A子は私を試したのだろうか。それとも、単に大人を信頼していいだけなのだろうか。

私はA子の内に、大人への強烈なまでの反発感情を感じ続けてきた。私に、自分に添うことをどこまでも要求し続けてくる。それは、今まで自分が大人にされてきたことを、今度は私に向けているように思われた。これがA子なりの自分探しのやりかたなのだろうと思ひながらも、あまりにも私の意向が無視され続けたり、キッと反発されると、ついむかつとして、語気が荒くなり、押さえる手に必要以上に

力がこもる。それをA子は敏感に感じとり、また私に背を向ける。お互いに近づいたり離れたりを繰り返しながらようやくここまできて、少しはふつうにやりとりができるようになったと思つたのに、やはりそう簡単にはいかないのであるうか。

A子は今までひとりでいることが多かった。周りのことはよく見ているのに、子どもたちとはあまりかわらうとしない。しかし、大人には違つていた。かまってくれそうだとみると、すぐに自分から近づきかわいらしげにふるまう。それで関心が引けなければ、後は知らん顔である。

そんなA子が、少しずつ友だちに積極的に働きかけるようになったのはこのころからである。そして、だんだんに友だちという時間が長くなっていった。けれども、かたくなに自分を主張し譲らなかつたりして、相手が離れたり自分で抜けたりと、ひと

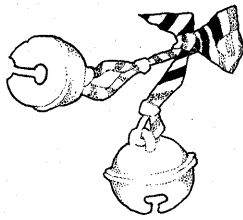
りの時間も多かった。大人ばかりでなく子どもに対しても、相手が自分に合わせることを要求しているように私には思われた。

私に対しては、表だつた反発は少なくなつたけれど、聞いているようでやらない、言われたことをわざと長い時間かけてするなど、やはり反発は続いていた。

### もう一回だけやりたい

前のことからほぼ一年後の、五歳の五月のことである。

ままごと道具の大半を移動して大きなうちわを作つて遊んでいたA子、C夫、D子、E子に、私は片づけの声をかけてから、遊戯室に行った。戻つてみると、相変わらず盛大に遊びが繰り返らわれている。A子は、この遊びの前にF子とテラスでままごとをしていた。それがそのままになっている。



ちょうど室内にいたF子に、片づけるように言う  
と、ちょっと渋ったが出かけていった。私は、まる  
で片づける意志なく遊び続けるA子にも、テラスの  
ままごとを片づけるように促した。A子が外ままご  
とを始めることは多いが、きちんと片づけたことは  
ほとんどない。「だってFちゃんも遊んだ」「Fちゃ  
ん、今行ったわよ。Aちゃんも行きましよう」「A  
子、ここ片づける」「でも、Fちゃんひとりじゃ大  
変だから、一緒に片づけてきましよう。ここはD  
ちゃんたちでできるから」。有無を言わさない私の

語調に、A子は

渋々出ていった。

砂場の片づけを

手伝いながら、遠

目に見ていると、

どうも遊んでいる

ようにみえる。や

れやれ、やっばり行かなくちゃだめかな、と思っ  
ていると、A子がふらふらとテラスから出ていった。  
花びらを拾いに行ったようだ。テラスにいつてみる  
と、F子にG子も加わって、作りかけのごはんを再  
び作りだしていた。楽しそうだが時間が時間であ  
る。きっぱりと促すと、F子がさっさとやり始め  
た。A子にも持っていくものを頼もうとするとなら  
りとかわされてしまった。さらに強く言うと、よう  
やくばけつをひとつだけ持ってくれる。しかし、そ  
れも道具入れには戻らず、部屋の入り口に放り出さ  
れたままになっていた。

部屋に戻ると、A子の姿は見えない。片づけを手

伝っている、いつの間に入り込んだのだろうか、

すみっこのピアノの下にいた。みんなが片づけてい

るのに、ひとりトライアングルを手にしている。さ

すがにむっとして、A子に近づき「Aちゃん、せん

せいもう何回もお片づけて言ったわ」と語気強く

言う、「もう一回だけやりたい」と哀願するように言われた。まったくもう、身勝手なんだから、むっとしたまま私はすぐ脇にあったトライアングルの袋を取り、A子の目の前に差し出した。怒りをぶつけてもいきりたたせるだけのようないまま、何と言おうかことはを探して見つけれないまま、私は袋の口を開け、中を指さした。するとA子は素直にトライアングルの中に入れた。その様子に私の気持ちがあつとゆるんだ。今度は穏やかに、A子の持つ棒を指さすと「だって、わかんない」と言ったが、入れる場所を指し示すときちゃんと入れてくれ、一緒にしなうことができた。時間にしたらごくわずかのやりとりであったが、お互いに心を重ね合わせられたような気がした。相変わらずA子の中にくすぶり続けるものを感じつつ、時々こういふ時がもてると、私はとても嬉しくなる。

私がA子に添うことができたと感じたとき、A子も私を受け入れてくれたように思える。そうでないときは、反発されるか、最近はのりくらりとかわされる。A子のわがままにつきあわされているような気もするが、A子はそれほどの大人不信をいまだに抱えているようにも思える。自分に心を添わせてもらう体験が少なければ、他人に心を重ね合わせることは難しい。他人に添うことを強いられ、そのために努力を重ねてきたとなればなおさらであろう。そうは思っていない、いまでもむかつくときは多く、保育者としての後悔も少なくない。しかし、そういったことも含めて、お互いに寄り添いあえるように、これからも試行錯誤を続けていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)